

希望と不安

環境科学部長／環境科学研究科長

井手 慎司

♪ 未来には幾つかの顔がある 例えば不安と希望……

さだまさしが歌う「あなたへ」の歌詞の一節である。

この原稿を執筆している3月の末、日本中でどれほど多くの人が、この歌詞と同じような思いで新年度のはじまりを待っていることだろう。ここ大学で言えば、今月、巣立っていった卒業生もそうであろうし、4月に入学してくる新入生もそうであるに違いない。それら学生の一人ひとりが、それぞれの希望、あるいは期待感、そして幾ばくかの不安といったものを抱えながら、いままさに、新年度を迎えようとしているのである。

とはいえ、考えてみると不思議な話である。なぜ、人は、人生の新たな門出を迎えるとき、希望と不安といった、相矛盾する感情を抱くのだろうか？

そもそも感情とは、最近の研究では、人類がその生存のため、進化の過程で身につけた能力であるという。生存のためには、重要な決断を瞬時にくださなければならない場面が多いが、必ずしも、判断のための材料が揃っているとは限らない。そんなとき、頭でいくら考えても、正しい答えが見つかるわけでもないし、もたもたしているわけにもいかない。そこで、素早い意思決定を手助けしてくれるのが“好き”あるいは“嫌い”といった感情なのだそう。たとえば、足元にヘビを見かけたとき、嫌悪感がこみ上げる、と同時に「ぎゃっ！」と叫んで飛び退く、といったことがこれに当たる。感情に頼った、そんないい加減な判断ではたして大丈夫なのかと訝るかもしれないが、少なくとも、そういったやり方で生き残り、さらには個体数を増やしてきた生き物の子孫（DNAを受け継ぐの）が、我われ人類なのである。

むろん、上記の理論だけでは、相矛盾する感情を抱くことの説明にはなっていない。が、ほとんどの人が同じような二種類の感情を同時に抱くということは、そのことに何らかの普遍的な意味があるはず。合目的的に考えれば、それがやはり生存の可能性を高めることにつながっていたから、と考えることが自然であろう。そうであるなら、希望と不安とは、人が未知なる事柄に直面したとき、臨戦態勢をとって進むよう、身体に対して「注意しろ、でも前に進め」と指示するシグナルのようなものだと考えてはどうだろう。たとえば、我われの遠い祖先が空腹の中、見慣れない木の実を見つけたとしよう。そんなとき、単純に喜んで、なにも考えずに木の実をすぐに口にに入れてしまうようでは危険すぎる。あるいは逆に、躊躇して、手を出さずにぐずぐずしていたら、横取りされてしまうかもしれない。恐る恐るでも勇気をだして、まずは手に取ってみる、舐めてみる、少しだけでもかじってみる——それで変な味がすれば、吐き出せばいいのである。問題がなければ、かぶりつけばよい。それで空腹を満たせるとしたら——そのほうが生存の確率を高める戦略としては優れていたのではないだろうか。

この“少しだけでもかじってみる”というのは、特に、入学してきたばかりの学生にお勧めの方法である。新入生は、大学という、いままでの経験則がまったく通じない、未知の世界に飛び込んできたわけである。おそらく、その身体は、希望と不安というシグナルを受けて臨戦態勢にあるはずである。意欲に燃え、五感は研ぎ澄まされ、学習能力も高められていることだろう。その絶好の期間に、食欲にいろんなことにチャレンジして（少しだけでもかじってみて）もらいたいと思う。そんな中から、生涯の友や自分が本当にやりたいことを見つけられるかもしれないと信じるからである。ただし、その一方で、臨戦態勢にあるとは、心身がいつもとは違う状態に、通常以上にストレスのかかった状態にある、ということを理解しておく必要がある。ただでさえ、寒暖差の激しい春先とは、昔から「木の芽時」と呼ばれ、体調や精神状態が不安定になりやすい時期でもある。だから、チャレンジしながらも無理はせず、少しでも心身に疲れや不調を感じたら、周りの人にそのことを伝えてもらいたい、迷わず、助けを求めてもらいたい……そう切に願うのである。